

## 今週の為替相場見通し(2016年12月12日)

| 総括表      |      | 先週の値動き |                 | 今週の予想レンジ        |
|----------|------|--------|-----------------|-----------------|
|          |      | 注      | レンジ             |                 |
| 米ドル      | (円)  |        | 112.87 ~ 115.37 | 112.00 ~ 117.00 |
| ユーロ      | (ドル) |        | 1.0505 ~ 1.0875 | 1.0400 ~ 1.0650 |
| (1ユーロ=)  | (円)  |        | 118.70 ~ 123.50 | 120.00 ~ 123.50 |
| 英ポンド     | (ドル) |        | 1.2548 ~ 1.2775 | 1.2450 ~ 1.2700 |
| (1英ポンド=) | (円)  | *      | 142.57 ~ 146.04 | 143.50 ~ 146.50 |
| 豪ドル      | (ドル) |        | 0.7414 ~ 0.7509 | 0.7350 ~ 0.7550 |
| (1豪ドル=)  | (円)  | *      | 83.79 ~ 86.10   | 84.00 ~ 87.00   |

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

### 1. 米ドル

為替営業第二チーム 下山 泰典

(1) 今週の予想レンジ: 112.00 ~ 117.00 円

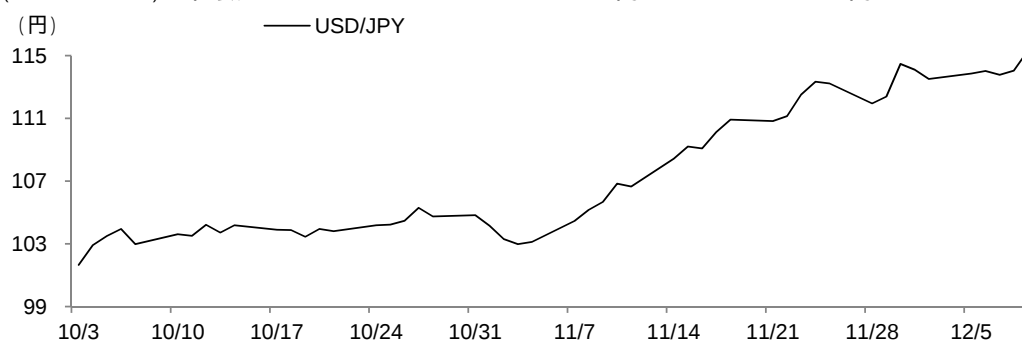
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は上値の重い展開となった。週初5日、イタリアで行われた憲法改正の是非を問う国民投票の出口調査で改正反対派が優勢と伝わりユーロ/円が下落すると、ドル/円も一時週安値となる112.87円をつけた。その後開票が進んだものの、もはや材料視されず、ドル/円は東京市場オープン前に113円台半ばまで反発した。米金利上昇や欧州株価の堅調推移を背景に114円台後半まで上昇するも、ユーロ売りポジションの手仕舞いが進むと、ストップロス巻き込みながらドル/円は113円台前半まで下落した。6日は、不良債権問題が懸念されていた伊大手銀行への公的支援を用意との報道が伝わりリスク回避の動きが後退したことから、114円台前半まで上昇する場面も見られたが、新規材料に欠ける中で上値重く推移した。7日は、米金利の低下や原油価格の下落を背景に113円台後半まで下落。8日も米長期金利が低下する中、113円台前半まで下落したが、その後のECB理事会の結果や9日にECBが伊大手銀行の救済完了期限について延期を拒否したとの報道を受けたユーロ売り・ドル買いが全般的なドル買いに波及し、同日にはドル/円は週高値となる115.37円まで上昇し、115.36円で越週した。

今週のドル/円相場は、上値重く推移した後には下落する展開を予想する。これまでの急激な上昇を見る限り短期筋はドルロングポジションを構築していると思われ、その利益確定ないしポジション調整のドル売りが週末にかけて優勢になると考えている。注目したいイベントは13日(火)~14日(水)に開催されるFOMC。政策金利の25bp引き上げが決定されると思われる一方、発表されるFOMCメンバーの政策金利見通し(ドットチャート)は、トランプ大統領就任前の現状では前回のものがほぼ据え置かれるだろう。来年以降の利上げペース加速を示唆するような内容が出ないことで、FOMC後には年末に向けてドルロングを調整する動きが優勢となるのではないかと。そうだとすれば、事前に会合前からドルロングポジションを調整してくる筋がいても不思議はなからう。先週見られた、欧州発イベントを受けたユーロ売りを端緒とする為替相場全般でのドル買いによりドル/円相場が押し上げられる展開には注意したいが、基本的には今週のドル円相場は上値重く、年末に向けては徐々に下落する展開を考える。

### (3) 先週までの相場の推移

先週(12/5~12/9)の値動き: 安値 112.87 円 高値 115.37 円 終値 115.36 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

為替営業第二チーム 鶴田 涼平

(1) 今週の予想レンジ: 1.0400 ~ 1.0650 120.00 ~ 123.50 円

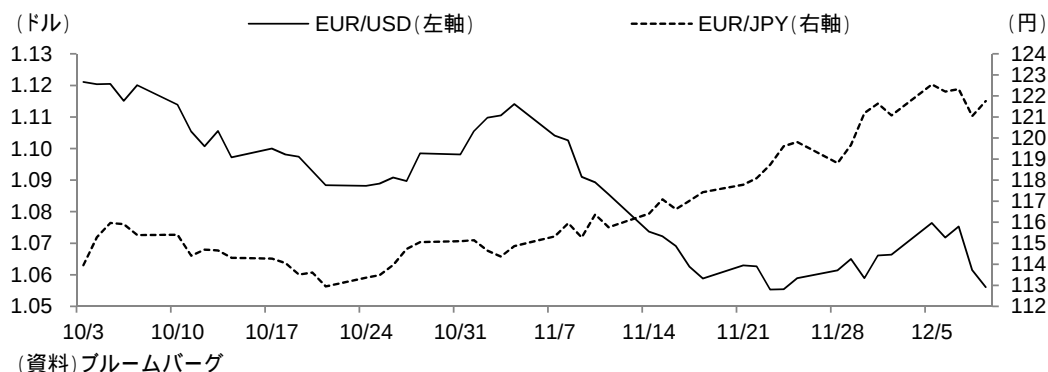
## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ相場は動意が乏しい展開。週初5日、イタリアで行われた憲法改正の是非を問う国民投票の出口調査で改正反対派が優勢と伝わり、レンツィ首相が敗北宣言を発表すると、ユーロ/ドルは年初来安値となる1.0505まで急落。その後は、欧州主要国の金利上昇を背景にユーロ/ドルは一時1.08ちょうど近辺まで反発した。6日、独10月製造業受注が市場予想を上回ると、ユーロ/ドルは1.07台後半まで強含む場面が見られるも、直ぐに1.06台後半まで下落。7日、翌日にECB理事会を控え、ユーロのショートカバーが相次ぐと、ユーロ/ドルは1.07台後半までじりじりと上昇。8日、注目されたECB理事会では政策金利は据え置きとなるも、月間の資産買い入れ額を縮小するとの発表にユーロ/ドルは一時週高値となる1.0875まで急上昇。しかし、資産買い入れの延長期間が事前予想を上回ったことや、必要に応じて増額や更なる延長もあり得ることが示されたことなどを受け、ユーロ売りが強まるとユーロ/ドルは1.06台割れまで反落した。9日、米12月ミシガン大学消費者信頼感指数が2か月連続で大幅上昇し、原油相場や米株も堅調推移する中、米長期金利の上昇も相俟ってドル買い優勢の展開となり、ユーロ/ドルは1.05台前半まで下落。その後は、週末を控えポジション調整の動きもあり、1.05台半ばまで値を戻し越えた。

今週のユーロ相場は上値の重い展開を予想する。欧州における年内最後の注目イベントとも言えるECB理事会では、拡大資産購入プログラム(APP)の期間延長が決定された。月間購入額については、800億ユーロから600億ユーロへ減額されたが、延長期間については事前予想の6か月を上回る9か月に設定され、年間購入額で見れば市場予想を上回る緩和的な結果であったと言える。ユーロ相場も初期反応こそ量的緩和縮小を意識したユーロ買いが進行したものの、実質的には緩和政策が拡大されたことが伝わりユーロ売り優勢の展開となった。ドラギECB総裁の会見においても引き続きの緩和姿勢について言明されている状況下、ユーロを積極的に買う展開とはならないだろう。そして今週の焦点となるFOMC(13~14日開催)については、米11月雇用統計を無難に通過し、FRB高官らのタカ派的発言を数多く耳にする中、利上げをしない理由が見当たらない。予想通り利上げが決定されても既に市場の織り込み度合いも相応に高いことから、マーケットの反応は限定的に留まる可能性はあるが、ドル売り優勢とはならないだろう。むしろ安心感からドル買いが進行する可能性の方が高いとみられ、ユーロ相場の重石となりそうだ。先週末にかけては、やや一服感をみせていた米金利上昇とドル高地合いが再燃し始め、トランプラリーが再び活発化する様相を見せていることも、見逃せないであろう。ユーロ欧州におけるリスクイベントを消化しつつあり、底堅いドル主導の相場展開が想定される状況下、ユーロ/ドルが上伸するには手掛かりに乏しく、上値の重い値動きに終始することになりそうだ。

## (3) 先週までの相場の推移

先週(12/5~12/9)の値動き: (対ドル) 安値 1.0505 高値 1.0875 終値 1.0560  
(対円) 安値 118.70 高値 123.50 終値 121.78



## 3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.2450 ~ 1.2700 143.50 ~ 146.50 円

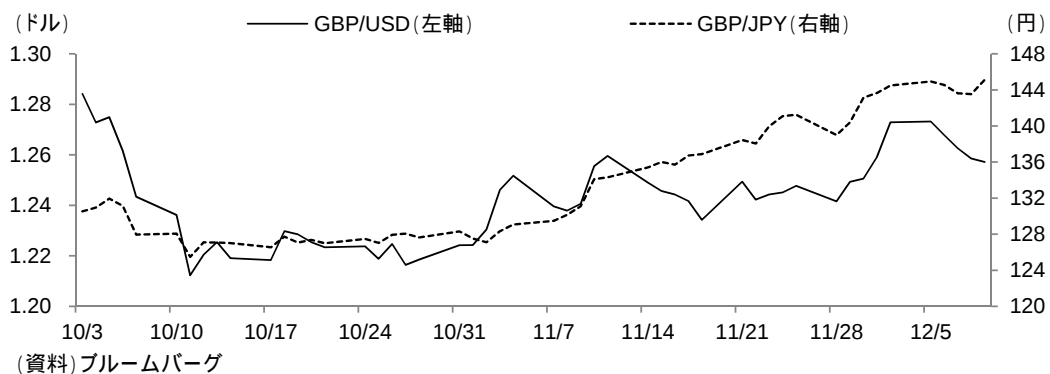
## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、週前半は対ドル・対円でじり高、対ユーロでじり安、週央は全面安、週後半は対ドルで下押し、対円・対ユーロでじり高と、値動きが分かれた。ポンド側に特段の材料がなく、ドル要因、ユーロ要因、円要因などに局面局面で振らされた結果と言えよう。週明け通貨市場は、4日投票された伊国民投票の結果を受けた乱高下で始まった。実質的なレンツィ首相信任投票が否決されたことでユーロ全面安やリスク回避の円高が先行した。同国金融機関の健全性に対する不安や、解散総選挙、大衆主義政党躍進から伊のEU離脱までが警戒されたことがその要因。しかし、この流れは長続きせず、欧州勢の参入に前後して反転。同日投票されたオーストリア大統領選で極右候補者が退けられたことを好感した他、伊国民投票否決は純粋に性急な憲法改正に対する否定であり、英国民投票、米大統領選とは一線を画すとの見方が広がったことが、反転を促したものと考えられた。前後してポンドは、対ユーロでは反落したものの、対ドル、対円ではユーロ反発に連れて上昇した。6日以降、ポンドは全面軟調に。英のEU離脱交渉で欧州委員会の代表を務めるバルニエ氏が、「(交渉結果を英・EUがそれぞれ批准する手続きを考慮して)来年3月に離脱交渉が始まった場合、18年10月までに同交渉を終える必要がある」と述べたことが嫌気された模様。2年でも短過ぎると見られていた交渉期間が、実質的に更に短縮されることで、十分な準備ができないまま英がEUから放逐されるとの警戒感が広がった。その後、市場の関心は8日の欧州中銀理事会に。来年4月以降、資産購入策を600億ユーロに減額して9か月間延長するとの決定は、記者会見におけるドラギ総裁の極めてハト派的な姿勢とあいまって、ユーロ全面安を誘った。しかし、週引けに掛けては、この決定が世界的な長期金利上昇を促し、10年国債利回りが0%にアンカーされた円が、金利差拡大を材料に全面安に転じた。

今週の英ポンド相場は、引き続き、ポンド側に特段の要因のない、方向感を欠いた横ばいを予想。市場の関心は14日(水)の米連銀公開市場委員会にあり、とりわけ、このイベント通過までは目立った値動きは期待薄だろう。上述バルニエ氏発言の他に、先週は、保守党議員の辞任を受けて開催された予備選で、野党労働党が大きく得票率を落とした(8日)、デイビス英EU離脱担当相の、「(メイ首相の発言とは裏腹に)EU離脱の衝撃を緩和するための過渡的措置の合意には興味がない」との(英金融機関代表との会合における)発言が漏洩したり(9日)と、EU離脱交渉や英政局の今後に関して興味深いイベントは散見されたが、それらがポンドに与えた影響はほとんど読み取れなかった。15日(木)には英中銀金融政策委員会の結果・議事録発表が予定されるが、市場の予想は基準金利の0.25%・資産購入額上限の4350億ポンド据え置きで一致しており、予想通りの結果に、ポンドが反応を示す可能性は考え難い。他に英発では、13日(火)に英11月消費者物価指数、14日(水)に英8~10月失業率(ILO基準)・同平均賃金、15日(木)に英11月小売売上高といった主要マクロ経済指標の発表が予定されるが、市場の関心は低い。米連銀公開市場委員会に関しても、市場の予想は25bpの利上げでほぼ一致しているが、市場は来年の利上げペースに関心を抱いており、結果発表後の声明文やイエレン議長記者会見に、そのヒントが見出せれば、積極的な利上げ姿勢にドル買い、その逆にドル売りと素直な反応が予想できるだろう。

## (3) 先週までの相場の推移

先週(12/5~12/9)の値動き: (対ドル) 安値 1.2548 高値 1.2775 終値 1.2576  
(対円) 安値 142.57 高値 146.04 終値 145.14



## 4. 豪ドル

為替営業第二チーム 森谷 友一

(1) 今週の予想レンジ: 0.7350 ~ 0.7550 84.00 ~ 87.00 円

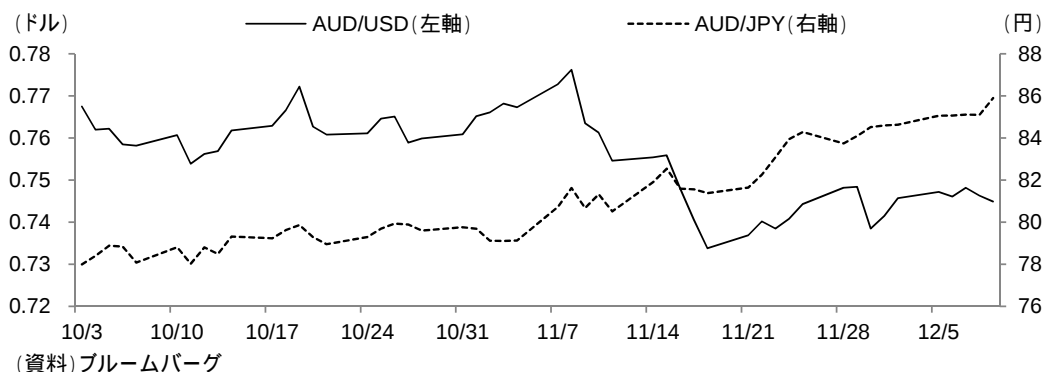
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は対ドルで揉み合い推移となった一方、対円では上昇する展開となった。週初5日に対ドルで0.74台半ば、対円では84円台半ばでオープン。イタリア国民投票の出口調査において反対派が優勢と伝わり、リスク回避的な豪ドル売りが強まると対ドル・対円でそれぞれ週安値となる0.7414・83.79円まで下落。しかし、直ぐに反発すると、原油価格の堅調推移に連れて対ドルで0.74台後半、対円では85円台前半まで上昇した。6日は豪州準備銀行(RBA)理事会において市場予想通り政策金利が据え置かれると、相場の反応は限定的となり、対ドルで0.74台での方向感に乏しい推移となった。7日は豪7~9月期GDPが市場予想を大きく下回るマイナス成長となり、対ドルで0.74台後半から0.74台前半まで急落。しかし、その後は原油価格や欧米株の上昇を背景にリスクオンの動きが強まると豪ドルは買われ、対ドルで0.74台後半を回復した。8日は前日の流れを引き継ぎ対ドルで一時週高値となる0.7509まで上昇。しかし、ECB理事会において月額資産購入額減少が決定されると米金利上昇に伴うドル買いが強まり、0.74台前半まで下押しされた。9日は週末に控えるOPECと非加盟国の会合への期待感から原油価格が堅調推移となり対ドルで0.74台後半、対円では一時週高値となる86.10円まで上昇。しかし、米金利上昇に伴うドル買いが強まると対ドルでは下落に転じ0.74台半ばで越週した。一方、対円ではドル/円の堅調推移を背景に底堅い値動きが続き85円台後半で越週した。

今週の豪ドル相場は底堅い展開を予想する。10日に開催されたOPECと非OPEC加盟国の会合では15年ぶりに原油生産量の協調減産で合意に至った。この結果を受けて原油価格は底堅い推移となることが予想され、豪ドル相場をサポートする材料として意識されるだろう。13~14日にかけて開催されるFOMCでは利上げ決定が確実視されており、注目はFOMCメンバーによる政策金利見通し(ドットチャート)だ。トランプ次期大統領の政策については不透明感が強く、今後の動向を見極めたいとの考えから、今回発表されるドットチャートは9月時点の見通しから大幅な変化はないと予想される。その場合、材料出尽くし感からポジション調整のドル売りが強まると考えられ、豪ドルを押し上げることになるだろう。また、15日(金)に豪11月雇用統計が発表される。市場予想を下回る結果となれば豪ドル売りで反応すると考えられるも、足許ではRBAに対する追加緩和期待は高くはなく、指標の下振れを受けての豪ドル売りは一時的なものに止まると予想する。なお、FOMCの結果が上述のシナリオと異なり、ドットチャートが上方修正された場合には、大きくドル買いが進行する可能性も想定しなければならない。もっともその可能性は小さく、豪ドル相場は底堅い推移になると予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(12/5~12/9)の値動き: (対ドル) 安値 0.7414 高値 0.7509 終値 0.7455  
(対円) 安値 83.79 高値 86.10 終値 85.90



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。